若年層の作文にみる中国語の文語

石　崎　博　志

はじめに

中国語の母語話者が文語を身に付ける際，どの段階で，どのような文語を使うようになるのか。若年層の作文は，どのような文体で記され，それは学年別にどのような変化が表れるのか。そもそもその変化を測る基準として，どのような項目を用いるのが有効か。本稿はこれらの問題を明らかにするための基礎作業である。

本稿では次章において基礎資料の収集に使用した《第一范文网》について説明し，第２章で中国語の口語と文語のあいだにはどのような違いがあり，文語がどのような表現としてあらわれるのかを先行研究を整理しながら示す。そして，本稿における文語表現の基準を示したうえで，小・中・高の各学年につき１万字の作文を対象に基礎調査を行った結果と，文語の変化を測る基準として何が有効かを示す。

１　基礎資料について

本稿では《第一范文网》というウェブサイト[1)]から小学校１年生から高校３年生までの作文を任意に抽出し，コーパスとした。《第一范文网》とは実用文の文案を収集したサイトで，多種多様な文書案が提供されている。例えばオフィス業務に関わる業務報告や慶弔にまつわる例文，広告のキャッチ・コピー，契約書や個人の履歴書なども含まれる。また児童・生徒の学習補助教材や読書感想文，教師向けの各科目の指導案[2)]，古典や現代をカバーした文学作品，または中国各地の郷土料理のレシピや，年賀状など祝祭日にちなんだメッセージ

といった日常生活を送る上で必要となる文案を提供している。

そうした多様な文案のなかで「優秀作文[3)]」として，小学生・中学生・高校生の作文がアップロードされている[4)]。これにより各学年の作文を一覧できるだけでなく，50字，100字，200字，300字…1,000字といった規定字数をもとに整理することが可能になる。そこで著者は小学1年生から高校3年生による作文を対象に学年ごとのコーパスを作成し，各学年の文字数を約1万字に均一化して基礎調査を行った。この1万字という文字数は，実際の文字数（くぎり符号を含む漢字数）ではなく，各作文の規定字数を合計したものである[5)]。

なお本稿で分析対象とするのは，作文の表題と地の文である。文中に引用された古典文や成語，外国語から翻訳された文章，英語などの外国語，コーテーションでくくられた実際の発話を再現した箇所は分析の対象外としている。

2　文語の品詞

右の表1は口語の品詞分類をもとに冯胜利（2003）など先行研究で文語であることが指摘されている語彙を配置したものである。ただ文語においては全てが口語語彙のカテゴリーと対応する訳ではない。例に挙げた語の品詞の認定は商务印书馆《现代汉语词典》第7版に従うが，これに収録されていない語は小学館『中日辞典』および『超級クラウン中日辞典』で補うこととする。品詞は原則として単語レベルで認定する。

表1で挙げる例は，冯胜利（2006），同（2010）の指摘するように，1音節語は他の形態素と組み合わされ2音節を1モジュールとして用いられ，2音節語はそのまま1モジュールとして用いられる。

それでは以下に表1について個別に説明を加える。表1の「区別詞」に配される語群は，口語では構造助詞“的”を伴い名詞を修飾するが，文語においては“的”を用いずに名詞を修飾する場合がある。

「数詞」欄に記した例はいわゆる大字“大写数字”で，口語と文語で発音の違いはないが，表記の違いとして表れる。ただ文語であれば常に大字が書かれ

表１　文語の品詞一覧

カテゴリー				例
実詞	体詞	名詞	名詞	［具体］儿童，患者，牛乳，禽蛋，膳食，医师，饮品 ［抽象］款，所见，所能，所在，所幸，所致
			場所詞	此，京，沪，日，东瀛
			方位詞	而外，内，外，中，其中
			時間詞	此时，当时，而今，如今，目前，日前，日内，往常
		区別詞	区別詞	长期，根本，基本，科学
		数詞	数詞	壹，贰，叁，肆，伍
		量詞	量詞	日，周，元
		代詞	体詞性代詞	［人称］本人，他人 ［指示］本，此，该，其，之，如上，如下 ［疑問］何处，任何，若干
	述詞		述詞性代詞	如何，为何，何以，亲自
		動詞	一般動詞	［判断］为，系 ［存在］保有，具有，拥有 ［所在］在于 ［一般］盼[6)]，取，食，售，如，阅，置，著，抵达，服用，给予，购买，加以，进行，举行，互动，忽视，叹为，销售，予以，安于，足以 ［能願］得，能够，得以，无法
			方向動詞	なし
			助動詞	当，将，须，宜，应当，不得，不宜
		形容詞	性質形容詞	贵，易，巨，暇，佳，久，同，微，持久，苦于，美味，少于，宜于，稀有，醒目，清晰，不得已
			状態形容詞	なし
虚詞		副詞	副詞	［程度］深，甚，颇，略，极为，极其 ［範囲］共，互，均，皆，亦，总，彼此 ［時間］曾，忽，已，尚，立即，依然，日益 ［否定］莫，未，无，勿，无以 ［疑問］何故，何尝，为何，是否
		前置詞	前置詞	［方式］将，以 ［比較］与 ［場所・方向］自，自从，至，迄至 ［原因］鉴于，至于，关于
		接続詞	接続詞	［連合］并，而，与，或，以及 ［偏正］故，扔，若，则，而后，而况，而又，然而，如其，如若，甚而，于是，以及，之后，之所以
		助詞	助詞	［語気］么，而已，则已，与否 ［構造］之
		語気詞	語気詞	なし

る訳ではなく，紙幣や貨幣，小切手，領収書など会計書類の改竄を防ぐ目的で使用されている。

「代詞」は口語との違いが顕著な品詞と言える。例えば，接頭辞として用いられる“该”は主に公文書に常用される。そして“其实”，“其他”を除く“其”を含む表現や“此”を含む語は，文語の反映であるとみなせるため，文語的な表現を判別する際に有効であると考えられる。

「動詞」においては，“2 音節動詞＋2 音節動詞”や“2 音節動詞＋2 音節名詞（3 音節名詞）”の組み合わせをとるものがあり，“进行”，“加以”，“给予”，“予以”は後ろに 2 字動詞をとり，“举行”の後ろは 2 音節名詞や 3 音節名詞をとる。

“进行”：调查，研究，战争，教育，指导，考察，合作，交涉，改革，开发，批判，判决，比较，分析，讨论，反思

“加以”：说明，解释，介绍，指导，解决，限制，控制，改良，完善，批评，运用，分析，考虑

“给予”：支持，鼓励，帮助，奖励，鼓励，同情，关心，肯定

“予以”：表彰，警告，批评，通报，协助，批准，惩罚，表扬，解释，安排，挽救，保障，照顾

“举行”：彩排，晚会，会演，婚礼，集训，典礼，会谈，舞会，宴会，演奏会，比赛，国葬，罢工，葬礼，游行，丧礼，博览会，欢送会，运动会，听证会，义卖活动，军事演习

さらに単音節動詞においては，「おく」義において“放”を使わず“置”を使用する，「みる」義において“看”を使わず“见”や“盼”を使用する，「とる」義において“拿”を使わず“取”を使用するといった基本語彙においても違いが観られる。こうした形態素は成語などに残るが，他の形態素と結合することで文語としても使われる。

また「副詞」においては，口語では“已经”，“大约”，“一共”，“仍然”，“互相”を使うが，文語ではそれぞれ“已”，“约”，“共”，“仍”，“互”と一音節で表現

される。また“(还)没”を使わず“未”を使う例も文語に特有の表現である。

「接続詞」のなかで連合構造をなすものは，２音節語と多音節語を接続する役割を果たすものである。例えば，“预防并治疗”，“琐事而发愁”，“帮助与合作”，“或清艳或娇贵”などの韻律は，文語特有の表現といえる[7)]。

３ 「文語形態素」を用いた口語と文語の識別

前述のように文語は２音節を１モジュールとするが，そのなかには１つの形態素や単語に特定の形態素を付加して２音節語ないし３音節語を構成して文語化するものがある。例えば，“逢”の直前に“相”を付加して“相逢”としたり，“利用”の直後に“于”を付加して“利用于”としたりすることで文語として振る舞う語彙がある。こうした“相”や“于”という要素を本稿では「文語形態素」と呼ぶ。これらは表１に観られるように実詞と虚詞の別なく複数の品詞に横断的に観られ，かつ意味上の偏りがない。よって本稿では暫定的に以下の23の文語形態素を利用し，若年層の作文に反映した文語を測る基準とする。以下にそれらにはどのようなタイプがあり，それらがどの品詞に属するかを示す。例えば，文語形態素“而”を含む語において，“而”を前に置く単語（前置タイプ），“而”を後ろに置く単語（後置タイプ），“而”を単独の接続詞として用いる単語やフレーズに分類し，以下の小節でその品詞と例を挙げたい。

また表１に挙げたもののなかには，他の要素とは結合せず，単独で使われる語もある。例えば代詞や助詞として用いる“之”や代詞の“此”，“其”がそれにあたるが，それらの文語も口語語彙との明らかな対立が観られるため，用例をカウントする項目として用いる。その一方で文語形態素を含みつつも口語としても用いられる語もあるため，本稿で用例としてカウントしない語については以下の各小節において※で注記したい。

3.1 “之”

“之”は以下のように助詞と接続詞・代詞の用法がある。

【助詞】“朋友之间”，“回来之后”，“来之不易”

【接続詞・代詞】“之后”，“总之”

助詞“之”の用法には複数あり，定語と中心語の間に用いて修飾構造をなす用法と主述構造の間に用いて修飾構造をなす用法がある。代詞“之”の用法も複数あり，人や事物を指す用法と，特定のものを指さない用法がある。とりわけ代詞として単語の構成要素として用いられる時には接続詞に分類する。

なお，“回来之后”のように“之后”の前に何らかの修飾成分を伴う場合は，“之”を助詞としてカウントし，“之后”の前に修飾成分を伴わない場合は接続詞として数える。

3.2 “而”に関連する語[8)]

3.2.1 前置タイプ“而～”

【名詞】“而今”

【方位詞】“而外”

【助詞】“而已”

【接続詞】“而后”，“而况”，“而又”

【動詞】“而来”，“而去”，“而动”，“而行”，“而哭”，“而过”，“而死”，“而胜”，“而胜”，“而散”，“而返”，“而入”，“而出”，“而亡”，“而异”，“而下”，“而起”，“而归”

※口語でもよく使われる“而且”，“而是”は除外する。

3.2.2 後置タイプ“～而”

【副詞】“俄而”，“继而”，“甚而”，“时而”，“幸而”，“忽而”

【接続詞】“偶而”，“从而”，“故而”，“既而”，“进而”，“然而”，“已而”，“因而”

3.2.3 接続詞“而”

接続詞の“而”は主に 4 つの用法がある。それらの例を挙げると以下のようになる。

(1) 文頭で単独で用いる用法：“而我心中”

(2) 2つの2音節語を接続する用法：

“美好而梦幻”，“急速而微小”，“充实而美好”

(3) ［動詞］＋而＋［動詞］で4音節を構成する用法：“取而代之”，“不期而遇”

(4) ［動詞］＋而不＋［動詞］で4音節を構成する用法：

“避而不谈”，“视而不见”，“议而不决”，“避而不去”，“引而不发”，“存而不论”，“笑而不答”，“默而不言”，“久而不耕”，“脆而不杂”，“亏而不管”

3.3 “如”

3.3.1 前置タイプ“如～”

【動詞】“如常”，“如故”，“如同”，“如像”，“如意”

【名詞】“如今”

【代詞】“如此”，“如次”，“如上”，“如下”，“如许”

【副詞】“如期”，“如实”，“如数”

【接続詞】“如其”，“如若”

※“如此而已”は“如此”と“而已”のそれぞれに1例としてカウントする。

※“如何”，“何如”は形態素“何”を含む項目としてカウントする。

※“如果”は口語でも常用されるため除外する。

3.3.2 後置タイプ“～如”

【動詞】“不如”，“类如”，“恰如”，“胜如”，“犹如”，“宛如”，“正如”

【形容詞】“阙如”，“自如”

【接続詞】“莫如”，“无如”

※“比如”，“假如”は口語でも使用されるため除外する。

3.3.3 “如”（単独）

【動詞】“如”

※“万事如意”はカウントしない。

3.4 “于”

形態素“于”を含む語彙は動詞・形容詞・副詞・接続詞など多くの品詞に観られ，さらに語彙の種類も多い。“于”は後置タイプのみ用例としてカウントする。

【動詞】

“安于”，“倍于”，“便于”，“遍于”，“濒于”，“出于”，“对于”，“甘于”，“过于”，“基于”，“鉴于”，“乐于”，“利于”，“长于”，“迟于”，“处于”，“定于”，“敢于”，“利于”，“惯于”，“归于”，“合于”，“后于”，“急于”，“见于”，“鉴于”，“近于”，“居于”，“倦于”，“肯于”，“苦于”，“愧于”，“乐于”，“利于”，“忙于”，“免于”，“难于”，“迫于”，“期于”，“善于”，“胜于”，“适于”，“属于”，“位于”，“限于”，“陷于”，“形于”，“羞于”，“眩于”，“逊于”，“亚于”，“陷于”，“囿于”，“寓于”，“止于”，“至于”，“置于”，“重于”[9]，“拙于”

“不下于”，“不屑于”，“不亚于”，“不至于”，“不致于”，“沉迷于”，“沉侵于”，“沉醉于”，“根扎于”，“莫过于”，“有助于”，“得益于”，“取决于”，“防患于”，“致力于”，“无愧于”，“无碍于”，“无动于”，“无过于”，“无济于”，“无利于”，“无损于”，“无异于”，“无益于”，“无助于”，“相当于”，“相对于”，“相当于”，“相较于”，“以利于”，“有别于”，“有感于”，“有鉴于”，“有异于”，“有意于”，“绽放于”，“只限于”，“有鉴于”，“有鉴于”

【形容詞】“厚于”，“苦于”，“少于”，“小于”，“宜于”，“汲汲于”

【副詞】“甚至于”，“苦于”

【前置詞】“基于”，“鉴于”，“至于”

【接続詞】“乃至于”，“以至于”

※よく口語でも用いられる“终于”および接続詞“于是”は除外する。

3.5 “此”

3.5.1 前置タイプ“此～”

【時間詞】“此时”，“此刻”

3.5.2 後置タイプ“～此”

【動詞】“至此”，“专此”

【副詞】“彼此”，“从此”，“就此”，“特此”，“前此”，“自此”

【接続詞】“故此”，“据此”，“为此”，“由此”，

※“如此”および“原来如此”は“如”でカウントする。

※“因此”はカウントしない。

3.5.3 単独タイプ“此”

“此”は主に主格として用いられるほか，“从此以后”のように使用されている。

3.6 “总”

【副詞】“总”，“总是”

3.7 “未”

【副詞】“未”，“未曾”，还未”，还未”，

※“未曾”は“曾”でカウントする。

※“未来”はカウントしない。

3.8 “何”

3.8.1 前置タイプ“何～”

【代詞】“何处”，“何地”，“何如”，“何许”，“何事”，“何时”

【動詞】“何干”，“何谓”，“何以”，“何止”

【形容詞】“何等”

【副詞】“何必”，“何尝”，“何故”，“何妨”

【接続詞】“何况”

3.8.2　後置タイプ“何～”

【代詞】“如何”，“任何”

【副詞】“为何”

※“如何”，“何以”はそれぞれ“如”，“以”としてはカウントしない。

3.9　“有”

“有”は後置タイプのみ用例としてカウントする。

【動詞】

“保有”，“持有”，“赋有”，“独有”，“旧有”，“唯有”，“约有”，“共有”，“仍有”，“共有”，“富有”，“含有”，“具有”，“据有”，“领有”，“少有”，“设有”，“特有”，“稀有”，“享有”，“拥有”，“未有”，“占有”，“专有”，“著有”，“自有”…

【形容詞】

“公有”，“固有”，“罕有”，“私有”，“希有”，“现有”，“应有”，“原有”，“莫须有”，“无奇不有”，“应有尽有”

【副詞】“唯有”

3.10　“曾”

【副詞】“曾”，“不曾”，“曾经”，“几曾”

※“未曾”は“未”の項目としてカウントする。

3.11　“所”

“所”は後置タイプのみ用例としてカウントする。

【名詞】“所得”，“所见”，“所能”，“所剩”，“所在”，“所幸”，“所致”，“所以然”

【形容詞】“所属”，“所谓”

※接続詞の“之所以”は“以”としてカウントする。

※接続詞の“所以”，「全ての」を表す副詞“所有”，“无所谓”は対象から除外する。

※“前所未有”は“未”としてカウントする。

3.12 “为”

“为”は後置タイプのみ用例としてカウントする。

【動詞】

“变为”，“称为”，“分为”，“代为”，“结为”，“妄为”，“沦为”，“难为”，“视为”，“未为”，“无为”，“占为”，“转为”，“被誉为”，“成长为”

【副詞】

“大为”，“更为”，“极为”，“较为”，“略为”，“颇为”，“稍为”，“稍为”，“甚为”，“妥为”，“尤为”，“至为”，“最为”

【名詞】“无作为”

※口語でも常用されている“因为”，“以为”，“认为”，“成为”は除外する。

3.13 “其”

3.13.1 前置タイプ“其～”

【時間詞】“其后”

【代詞】“其余”，“其次”

3.13.2 後置タイプ“～其”

【副詞】“极其”，“更其”

3.14 “相”

“相”は前置タイプのみ用例としてカウントする。

【動詞[10)]】

“相爱”，“相安”，“相幇”，“相比”，“相差”，“相称”，“相成”，“相持”，“相处”，“相传”，“相抵”，“相逢”，“相符”，“相隔”，“相互”，“相会”，“相见”，“相距”，“相看”，“相礼”，“相连”，“相邻”，“相劝”，“相扰”，“相认”，“相商”，“相识”，“相思”，“相通”，“相托”，“相违”，“相向”，“相形”，“相沿”，“相依”，“相异”，“相映”，“相遇”，“相约”，“相争”，“相知”，“相助”，“相撞”，“相左”

【形容詞】

“相等”，“相对”，“相反”，“相仿”，“相近”，“相好”，“相配”，“相若”，“相善”，“相似”，“相同”，“相投”，“相像”，“相宜”

※副詞の“相当”，動詞の“相信”は対象から除外する。

3.15 “以”

3.15.1 “以”後置タイプ

【動詞】

“得以”，“给以”，“加以”，“借以”，“赖以”，“难以”，“示以”，“引以”，“用以”，“予以”，“致以”，“足以”

【副詞】“聊以”，“无以”

【接続詞】“据以”，“是以”，“之所以”

※口語でも常用されている“可以”，“所以”は除外する。

※“何以”は“何”としてカウントする。

3.15.2 “以”単独タイプ

【前置詞】

主に“以～为…”，“以～来…”，“以～而…”の形で用いられるもの。

3.16 “已”

“已”は後置タイプのみ用例としてカウントする。

【形容詞】“不得已”，“无已”
【動詞】“不已”
【副詞】“久已”，“业已”，“早已”，“已”
【助詞】“而已”，“则已”

3.17 “忽～”

“忽”は前置タイプのみ用例としてカウントする。
【動詞】“忽略”，“忽视”
“忽～忽～”：“忽上忽下”，“忽隐忽现”，“忽明忽灭”，“忽聚忽散”，
“忽冷忽热”，“忽高忽低”，“忽明忽暗”，“忽晴忽阴”，
“忽好忽坏”

3.18 “～否”

“否”は後置タイプのみ用例としてカウントする。
【副詞】“是否”，“能否”
【助詞】“与否”
※動詞の“否定”，“否认”はカウントしない。

3.19 “深～”

副詞“深”が単音節動詞と結合して“深～”となるものをカウントする。
【動詞】“深表”，“深得”，“深恶”，“深孚”，“深感”，“深究”，“深入”，“深受”，
“深思”，“深陷”，“深省”，“深知”，“深造”

3.20 “互～”

副詞“互”が単音節動詞と結合して“互～”となるものをカウントする。
【動詞】“互补”，“互动”，“互访”，“互换”，“互惠”，“互见”，“互救”，“互利”，
“互让”，“互生”，“互通”，“互助”，“互赢”

3.21 “皆”

“皆”は副詞として“都”と同様の用法で使われる。

3.22 “系”

“系”は断定・判断を表す動詞で，口語の“是”と同様の用法で使われる。

3.23 “宜”

“宜”は当為を表す助動詞で，“不宜如此”や“宜及于难”のように用いられる。

3.24 単音節の文語形態素

文語としての色彩が濃厚で，他の形態素と結合したり，また単独で使用される語に接続詞“而”，否定副詞“未”，代詞“其”，代詞“何”，代詞“此”，副詞“曾”，副詞“总”がある。これらの形態素に関連する語彙の使用には，背後に口語語彙の不使用という状況がある。それを表したのが表 2 である。

表 2　文語形態素からみた文語語彙と口語語彙

形態素	文語語彙	口語語彙
之	之	的，他，她，它
未	未曾，还未	还没，还没有
其	其后，其余，极其	然后，其他，非常
何	为何，如何，何时	为什么，怎么，什么时候
此	彼此，此刻，此时	这(个)，这儿，那(个)，那儿
曾	曾经	以前
总	总，总是	一直，都
如	如此，如今，正如，犹如	这样，像，好像
皆	皆	都

文語の使用状況をみるにあたり，本来なら文語語彙の使用と口語語彙の不使用という両面から調査すべきであるが，これについては稿を改めて考察したい。

3.25　文語表現と成語との関係

成語は古来より使われる固定フレーズを指すが，現代語には古典由来の成語が多数使われている。成語をその形式から観ると“咬文嚼字”，“拖泥带水”，“阳奉阴违”，“心直口快”などのように，実詞形態素のみから構成されるものが大多数を占める。だが，成語のなかには“重于泰山”，“青出于蓝”，“心乱如麻”，“问道于盲”，“不了了之”のように虚詞の形態素を含むものがある。また四字以外のものにも“欲速则不达”，“醉翁之意不在酒”のように虚詞を含むものもある。本稿ではこうした古典に由来する成語や固定化した表現は除き，文法的に多様な連語を構成し得るものを用例としてカウントする。例えば“重于泰山”という司馬遷『報任安書』に由来する成語はカウントしないが，“国家利益重于一切”や“过程重于结果”のように他の品詞と連語を構成する場合は用例としてカウントする。また『荀子』「勧学篇」に典拠をもつ“青出于蓝”はカウントしないが，“出于冲动”や“出于嫉妒心”は用例として数えることとする。

こうした文語の虚詞を含む成語は，中国の若年層が文語を習得する際の入り口となっており，古典の表現を応用して現代の文語に展開していると考えられる。

4　各学年の分析

本章では前章でみてきた文語特有の表現が小学１年生から高校３年生までの模範作文において，どの程度使用されているのかを考察する。表３以降の各表は１万字あたり作文を分析したものである。

ここでは３年を単位として，小学１年生から小学３年生，小学４年生から小

学6年生，中学生，高校生と3つの段階に分けてみていく。

4.1　小学1年生から3年生の作文

以下の表3は小学1年生“小学一年级”の作文から文語語彙を抽出したものである。左の「形態素」欄は「文語形態素」を示し，「合計」はその文語形態素の用例数の合計を示している。「タイプ」欄は前述の前置・後置などのタイプと品詞のタイプを記しており，それぞれののべ用例数を「小計」欄に記している。右の「用例（数)」欄には実際に使用されている用例を提出し，（　）内にはその用例数を記している。なお用例数が1例の場合は用例数の表示を省略している。

小学1年生の作文には文語の使用はあまり観られないが，“之”が早くも用いられ，散発的に“于”を使った表現や“其”を使った表現が観られる。

表4は小学1年生“小学二年级”の作文から文語語彙を抽出したものである。

小学校2年生の作文にもほとんど文語が観られないが，それでも否定副詞の“未”の使用が，“从未吃过”“未必吃过”の形で観られるほか，“有”の用例も若干は観られる。だが“于”を使った表現は1万字を対象とする限りでは小学1年生よりも少ない結果となっている。これは調査項目の総数においても全学年において最も少ない13にとどまっている。

これは総数のみならず，個別の語をみた範囲でも2年生の文語の反映が1年生より少ないことを示している。恐らく実際には小学校1年生の作文に教師による手が加わっている可能性があり，2年生の作文の方がその学年の実情を反映していると考えられる。

表5は小学3年生“小学三年级”の作文から文語語彙を抽出したものである。

小学校3年生の作文にもほとんど文語が観られないが，接続詞“而”の使用と，“而＋動詞”の用例が出現する。また調査した項目において少しずつ用例が数えられるようになるのが3年生であると言える。

表 3　小学 1 年生の文語用例数

形態素	合計	タイプ	小計	用例（数）
之	12	之(助)	10	朋友之间(2)，精彩之处(2)，九牛二虎之力(2)，种田之苦，菊花之中，雅致清秀之意，乡村之夜
		之(接)	2	之后，来之不易
而	4	而～	2	油然而生，而出
		～而	0	
		而	2	而(2)
如	6	如～	1	如此
		～如	1	犹如
		如	4	如痴如醉(3)，如爱迪生一样
于	5	～于	5	乐于(3)，游于，沉迷于
此	3	此～	0	
		～此	3	彼此，如此，与此同时
		此	0	
总	2	总	2	总是(2)
未	0	未	0	
何	0	何～	0	
		～何	0	
有	0	～有	0	
曾	1	曾	1	曾经
所	1	所～	1	所谓
为	1	～为	1	分为
其	2	其	2	尤其，勉为其难
相	2	相～	2	相比，相同
以	0	～以	0	
		以	0	
已	0	～已	0	
忽	1	忽～	1	忽然
否	0	～否	0	
深	0	深～	0	
互	0	互～	0	
皆	2	皆	2	粒粒皆辛苦(2)
系	0	系	0	
宜	0	宜	0	

（用例総数 42）

表 4　小学 2 年生の文語用例数

形態素	合計	タイプ	小計	用例（数）
之	3	之(助)	2	九牛二虎之力，快乐之果
		之(接)	1	之前
而	0	而～	0	
		～而	0	
		而	0	
如	1	如～	0	
		～如	0	
		如	1	胆小如鼠
于	1	～于	1	对于
此	0	此～	0	
		～此	0	
		此	0	
总	0	总	0	
未	2	未	2	从未，未必
何	0	何～	0	
		～何	0	
有	3	～有	3	带有，富有，宽有
曾	0	曾	0	
所	0	所～	0	
为	2	～为	2	称为(2)
其	0	其	0	
相	1	相～	1	相同
以	0	～以	0	
		以	0	
已	0	～已	0	
忽	1	忽～	1	忽然
否	0	～否	0	
深	0	深～	0	
互	0	互～	0	
皆	0	皆	0	
系	0	系	0	
宜	0	宜	0	

（用例総数 14）

表 5　小学 3 年生の文語用例数

形態素	合計	タイプ	小計	用例（当該単語の使用数）
之	14	之(助)	13	护蛋之星(2)，特殊之处，春之惊喜，美食之一，文雅之竹，折好之后，无奈之下，痛痒之际，血泊之中，喜悦之情，立身之业，苍茫之中
		之(接)	1	之后
而	12	而～	6	而来(3)，而行(2)，而出
		～而	0	
		而	6	而(6)
如	7	如～	3	如此(3)
		～如	3	不如，犹如，宛如
		如	1	如玉一般
于	1	～于	1	用于
此	4	此～	3	此刻(2)，此时
		～此	0	
		此	1	从此以后
总	4	总	4	总在，总是，总会，总能
未	0	未	0	
何	2	何～	1	何况
		～何	1	任何
有	2	～有	2	特有，具有
曾	0	曾	0	
所	1	所～	1	他们之所以哭
为	1	～为	1	成长为
其	4	其	4	其后(2)，其余，其
相	5	相～	5	与其他动物相比，大小相等，红白相间，相亲相爱
以	4	～以	3	引以，难以，之所以举行这个活动
		以	1	以食为天
已	0	～已	0	
忽	0	忽～	0	
否	0	～否	0	
深	0	深～	0	
互	0	互～	0	
皆	0	皆	0	
系	0	系	0	
宜	0	宜	0	

（用例総数 61）

4.2　小学4年生から小学6年生の作文

以下の表6は小学4年生“小学四年级”の作文から文語語彙を抽出したものである。小学4年生は，調査対象項目において小学3年生よりもやや少ない全用例数がカウントされている。そのなかでも“而”と“于”の形態素をもつ用例が目立つ。

表7は小学5年生“小学五年级”の作文から文語語彙を抽出したものである。小学校5年生は用例数が小学3年生や4年生比べて大きく伸びている訳ではない。そのなかでも“而”や“于”を使った表現は他の学年と同様によく観られる。

表8は小学6年生“小学六年级”の作文から文語語彙を抽出したものである。小学6年生ではその前の学年に比べ，用例数が大きく伸びる。そして調査項目の用例が広がる状況になるが，とりわけ“如”の使用が大きく伸びることが特徴であるほか，接続詞“而”と“于”に関連する語の増加が観られる。ただ，4.3に観るようにこの伸びはかなり極端に見える。

表 6　小学 4 年生の文語用例数

形態素	合計	タイプ	小計	用例（当該単語の使用数）
之	8	之(助)	5	生命之美，诚信之光，清新之感，一气之下，花海之中
		之(接)	3	之前(2)，总之
而	11	而～	3	而立，而至，而笑
		～而	3	反而(3)
		而	5	而(5)
如	6	如～	0	
		～如	1	不如
		如	5	如幻梦般，如鼓，如痴如醉，如翩翩起的妙少女
于	4	～于	4	属于，忠于，无济于，莫过于
此	1	此～	0	
		～此	1	在此
		此	0	
总	5	总	5	总(3)，总是，总之
未	1	未	1	
何	1	何～	1	何止
		～何	0	
有	4	～有	4	唯有，别有，应有尽有
曾	0	曾	0	
所	0	所～	0	
为	1	～为	1	极为
其	1	其	1	极其
相	0	相～	0	
以	1	～以	0	
		以	1	梦寐以求
已	0	～已	0	
忽	3	忽～	3	忽略(2)，忽视(1)
否	0	～否	0	
深	1	深～	1	深受
互	0	互～	0	
皆	1	皆	1	啼笑皆非
系	0	系	0	
宜	0	宜	0	

（用例総数 49）

表 7　小学 5 年生の文語用例数

形態素	合計	タイプ	小計	用例（当該単語の使用数）
之	8	之(助)	8	无奈之下，一发之际，女生之气，天壤之别，九牛二虎之力，闲暇之余，滴水之恩，撞击之后
		之(接)	0	
而	12	而～	1	而起
		～而	2	然而，反而
		而	9	而(9)
如	9	如～	1	如此
		～如	1	不如
		如	7	如泰山(2)，如飞，如乌龟，如钻石般，如，如生
于	5	～于	5	对于(2)，关于，形于，在于
此	6	此～	5	此时(5)
		～此	1	如此
		此	0	
总	2	总	2	总是(2)
未	0	未	0	
何	1	何～	0	
		～何	1	任何
有	3	～有	3	具有，独有，拥有
曾	0	曾	0	
所	2	所～	2	所说，所剩
为	0	～为	0	
其	0	其	0	
相	2	相～	2	涌泉相报，相比
以	4	～以	1	足以
		以	3	以羚羊般的，以猎豹般的，我以有他这样的朋友而自豪
已	1	～已	1	不已
忽	0	忽～	0	
否	1	～否	1	是否
深	0	深～	0	
互	0	互～	0	
皆	0	皆	0	
系	0	系	0	
宜	0	宜	0	

（用例総数 56）

表 8　小学 6 年生の文語用例数

形態素	合計	タイプ	小計	用例（当該単語の使用数）
之	20	之(助)	18	不速之客，生存之艰难，夏花之绚烂，秋叶之静美，250米之后（以下略）
		之(接)	2	将这个问题抛之脑后，来之不易
而	12	而～	1	而去
		～而	1	反而
		而	10	而(10)
如	29	如～	9	如此(6)，如同(2)，如今
		～如	9	正如(2)，宛如(2)，生如(2)，忽如，自如，犹如
		如	11	如(7)，如老鹰般，如猛虎，如释重负，如童话世界般
于	12	～于	12	对于(2)，沉侵于(2)，漫步于(2)，属于，陶醉于，沉醉于，绽放于，无动于，根扎于
此	17	此～	7	此时(4)，此刻，此事，此后
		～此	9	如此(7)，在此
		此	2	此(2)
总	7	总	7	总(5)，总是(2)
未	4	未	4	未(2)，未曾，还未
何	2	何～	1	何事
		～何	1	为何
有	4	～有	4	已有(2)，具有，拥有
曾	6	曾	6	曾(3)，曾经(2)，未曾
所	3	所～	3	所说，所爱，所谓
为	3	～为	3	占为，极为，作为
其	5	其	5	名副其实(2)，不得其解，极其，其乐融融
相	3	相～	3	相互，相同，相视
以	5	～以	1	足以
		以	4	以青春偶像剧哩的那一套，以童话般的，以超乎想象的韧劲，以 1:10险胜
已	4	～已	4	早已(3)，不已
忽	0	忽～	0	
否	0	～否	0	
深	2	深～	2	深感(2)
互	0	互～	0	
皆	0	皆	0	
系	0	系	0	
宜	0	宜	0	

（用例総数 139）

4.3　中学 1 年生から 3 年生の作文

以下の表 9 は中学 1 年生“初级中学一年级”の作文から文語語彙を抽出したものである。中学 1 年生においては，小学 6 年生に比べると用例数こそ減少するが，文語関連の用例がより広範に使われるようになる。それまであまり使われていなかった“何”に関連する語の増加も観られる。

表10は中学 2 年生“初级中学二年级”の作文から文語語彙を抽出したものである。中学 2 年生は何故か用例数が極端に落ち込む。用例総数では小学 6 年生よりもさらに少なくなる状況が見て取れる。

表11は中学 3 年生“初级中学三年级”の作文から文語語彙を抽出したものである。中学 3 年生についても，中学 2 年生ほどではないが用例数はさほど多くはない状況が見て取れる。この状況がある程度，中学生の実情を反映しているのなら，小 6 の状況は模倣や，先生の指導などの要因が関係している可能性もある。

表 9　中学 1 年生の文語用例数

形態素	合計	タイプ	小計	用例（当該単語の使用数）
之	15	之(助)	12	我们之间(2)，吾师之恩，清新之感，秋之遐思，枫树之下，一抹春之绿（以下略）
		之(接)	3	之后，恨之入骨，随之一愣
而	17	而～	5	而言(2)，而然，而去，而又
		～而	2	从而，反而
		而	10	而(10)
如	19	如～	6	如同(3)，如此(3)
		～如	5	不如(2)，宛如，正如，犹如
		如	8	如(8)
于		～于	8	对于(2)，大于，属于，善于，坐于，相较于，漫步于
此	6	此～	2	此刻(2)
		～此	3	如此(3)
		此	1	此
总	8	总	8	总(6)，总是(2)
未	4	未	4	从未(3)，前所未有
何	7	何～	5	何干(2)，何况，何尝，何如
		～何	2	任何，为何
～有	4	～有	4	拥有(2)，怪有，富有
曾	4	曾	4	曾经(4)
所～	4	所～	4	所爱，无所，所谓，所说
～为	3	～为	3	作为，化为，尤为
其	1	其	1	与其
相～	2	相～	2	相比(2)，相差，相配
以	5	～以	1	难以
		以	4	以(4)
～已	0	～已	0	
忽～	2	忽～	2	忽然(2)
～否	2	～否	2	是否(2)
深～	1	深～	1	深思
互～	4	互～	4	互帮互助(2)
皆	2	皆	2	皆融千秋，万言皆在不语秋
系	0	系	0	
宜	0	宜	0	

（用例総数 118）

表10　中学 2 年生の文語用例数

形態素	合計	タイプ	小計	用例（当該単語の使用数）
之	19	之(助)	19	天空之中，微笑之花，春夏之交，脑海之中，热情之中，生活之快乐，生活之痛苦（以下略）
		之(接)	0	
而	17	而～	7	而去(2)，而行(2)，而又(2)，而成，而今，而上
		～而	1	反而
		而	9	而(9)
如	13	如～	3	如今(2)，如此
		～如	1	宛如
		如	9	如(9)
于	4	～于	4	属于(4)，敢于
此	2	此～	1	此时
		～此	1	如此
		此	0	
总	6	总	6	总(3)，总是(3)
未	2	未	2	前所未有，未老
何	2	何～	1	何尝
		～何	1	任何
有	0	～有	0	
曾	1	曾	1	曾
所	2	所	2	所融化，所遇到的
为	2	～为	2	化为，誉为
其	1	其	1	尤其
相	2	相～	2	相反，相处
以	4	～以	0	
		以	4	以(4)
已	2	～已	2	早已(2)
忽	2	忽～	2	忽然
否	0	～否	0	
深	1	深～	1	深入
互	0	互～	0	
皆	0 [11]	皆	0	
系	0	系	0	
宜	0	宜	0	

（用例総数 82）

表11　中学３年生の文語用例数

形態素	合計	タイプ	小計	用例（当該単語の使用数）
之	14	之(助)	13	立身之业，苍茫之中，感恩之心，报答之心，每当开封之时，青春之光，一席之地（以下略）
		之(接)	1	总之
而	16	而～	5	而出，而过，而后，而落，而生
		～而	1	从而
		而	10	而(10)
如	13	如～	4	如此(2)，如同，如今
		～如	1	正如，又如
		如	8	如(8)
于	3	～于	3	由于，停留于，惊叹于
此	8	此～	4	此时(2)，此刻，此致
		～此	2	如此(2)
		此	2	此(2)
总	12	总	12	总(5)，总是(5)，总有，总之
未	1	未	1	
何	6	何～	4	何时，何地，何处，何尝
		～何	2	任何，如何
有	3	～有	3	唯有，富有，曾有
曾	2	曾	2	曾(2)
所	5	所～	5	所谓，所捉弄，所深究，理所当然，有所更高
为	7	～为	7	作为(2)，称为，化为，颇为，视为，叹为
其	2	其	2	果不其然(2)
相	4	相～	4	相聚，相视，相同，相伴
以	2	～以	1	难以
		以	1	以一个妓女羊脂球为正面人物
已	4	～已	4	早已(4)
忽	2	忽～	2	忽然，忽略
否	0	～否	0	
深	0	深～	0	
互	0	互～	0	
皆	0	皆	0	
系	0	系	0	
宜	0	宜	0	

（用例総数 104）

4.4　高校1年生から3年生の作文

ここからは高校生の作文を分析する。以下の表12は高校1年生“高级中学一年级”の作文から文語語彙を抽出したものである。高校1年生は文語の反映がそれまでよりも多くなり，用いられる文語の種類も多岐にわたるようになる。

表13は高校2年生“高级中学二年级”の作文から文語語彙を抽出したものである。

表14は高校3年生“高级中学三年级”の作文から文語語彙を抽出したものである。高校3年生では文語の使用が全般的に増えるが，とりわけ“于”の増加が顕著である。

以上の用例の総数を図1にまとめたので，参照されたい。横軸は学年を示し，左から右にかけて学年が上がるようになっており，縦軸は用例の延べ数の総数を示している。

図1をマクロに観た場合，文語の利用は学年が上がるにつれて増える傾向があると言えるが，小学2年生，中学2年生で用例数が落ち込む[14)]。これは学年を追うごとに増加するという当初の予想とは異なる結果である。さらに小学6年生と高校3年生において用例数が突出する傾向が観られるが，これらの結果には以下の要因が考えられる。

・受験対策で文語を意識した作文をするようになる（小6，中3，高3）
・思春期に入り，型にはまった内容や文体を避け，自由に作文をするようになる（中2，中3）。
・先生のサポートによる大人の文体の混入（小1）

文語の反映という点で言えば，小学生の作文は，文体面よりも内容面で評価の比重が置かれていることや，「子供らしい」文体として口語的な表現が選ばれている可能性がある。そして中学生の段階で，ある程度停滞するが，高校生の模範的作文では文語が増加するのみならず，古典や英語からの引用，対句的な表現の使用など多くの技巧が駆使される。文語文体の使用という点において

表12　高校１年生の文語用例数

形態素	合計	タイプ	小計	用例（当該単語の使用数）
之	28	之(助)	26	是之是非，天昂之别，人之根本，追求之航上，得胜之后，斤斤计较之辈（以下略）
		之(接)	2	取而代之，勿以恶小而为之
而	30	而～	10	而去(2)，而下(2)，而空，而亡，而上，而逝，而来，而落
		～而	3	然而，总而，显而
		而	15	而(15)
如	18	如～	10	如今(7)，如此(3)
		～如	1	正如
		如	7	如(7)
于	11	～于	11	对于(3)，勇于(2)，倍于，属于，归根于，加犯于，有利于，有助于
此	12	此～	7	此时(3)，此后，从此，此事，此起彼伏
		～此	2	为此，由此
		此	3	此(3)
总	5	总	5	总会(2)，总，总是，总在
未	3	未	3	还未，未曾，未
何	7	何～	2	何事，何尝
		～何	5	如何(3)，为何，任何
有	3	～有	3	拥有(2)，唯有
曾	9	曾	9	曾(6)，曾经，未曾，不曾
所	12	所～	12	所谓(3)，为人所耻，大家所用，所在，所说，所认同，所吞并，有所提升，理所当然，无所事事
为	1	～为	1	非为
其	11	其	11	极其(4)，其(6)，其次
相	1	相～	1	相逢
以	16	～以	1	籍以，据以
		以	15	以梦为圆心，以追求为半径，以梦为舟，以追求为帆桨，以少胜多，以铜为镜，以人为镜，不以为然，以梦为马(3)，以小见大，奋斗以争取，以书信，学以致用
已	1	～已	1	不已
忽	1	忽～	1	忽然
否	0	～否	0	
深	0	深～	0	
互	0	互～	0	
皆	0	皆	0	
系	0	系	0	
宜	0	宜	0	

（用例総数 169）

表13　高校 2 年生の文語用例数

形態素	合計	タイプ	小計	用例（当該単語の使用数）
之	26	之(助)	25	古之有云，龙舟之乡，天昂之别，火热之中，日起日落之间，事之是非，事之是非（以下略）
		之(接)	2	以尘土盖之，来之不易
而	24	而～	11	而来(3)，而起(2)，而又(2)，而出，油然而生，而下，而归
		～而	2	然而，反而
		而	11	而(11)
如	20	如～	9	如同(4)，如今(3)，如此(2)
		～如	1	犹如
		如	10	如(10)
于	15	～于	15	属于(2)，始于，归于，铭于，固于，坐于，在于，只于，送于，遗于，融情于，存在于，侵蚀于，置身于
此	15	此～	10	此时(5)，此刻(2)，此事，此情，此景
		～此	4	彼此(2)，如此(2)
		此	1	此
总	14	总	14	总(12)，总是(2)
未	7	未	7 [12]	未能(2)，未说，未看破，未见，还未到，前所未有
何	7	何～	3	何时(2)，何等
		～何	4	如何(3)，奈何
有	4	～有	4	拥有(2)，总有，独有
曾	5	曾	5	曾，曾经(2)，不曾(2)
所	12	所～	12	所期冀(2)，所思，所套牢，所禁锢，所熟知，所渴盼，所艳羡，所寻找，所居服，为所欲为，所表现出来的
为	5	为	5	化为(2)，称为，数为，成长为
其	8	其	8	其(4)，其中(4)
相	3	相～	3	刮目相看，相隔，相像
以	6	～以	4	难以(2)，得以，正以，之所以
		以	2	
已	1	～已	1	欣喜不已
忽	0	忽～	0	
否	3	～否	3	是否(2)，与否
深	1	深～	1	深信
互	0	互～	0	
皆	0	皆	0	
系	0	系	0	
宜	0	宜	0	

（用例総数 176）

表14　高校 3 年生の文語用例数

形態素	合計	タイプ	小計	用例（当該単語の使用数）
之	31	之(助)	29	臣服之心，相望之苦，你我之间，杂交水稻之父，人之未知，探索之路，幸福之花（以下略）
		之(接)	2	知之，总之
而	24	而～	9	而后(2)，而红，而已，而来，而去，而上，而又，而遇
		～而	8	然而(3)，时而(2)，惑而，视而不语，从而
		而	7	而(7)
如	14	如～	6	如此(3)，如今(2)，如实
		～如	6	正如(3)，诸如(2)，犹如
		如	2	如(2)
于	37	～于	37	敢于(14)，出于(4)，属于(3)，体现于(2)，源于(2)，铭记于(2)，对于，处于，胜于，沉溺于，急于，始于，不归于，善于，纠结于，独坐于
此	13	此～	0	
		～此	9	如此(3)，因此(3)，由此，从此，在此
		此	4	此(4)
总	4	总	4	总有(2)，总，总是
未	3	未	3	尚未，尚未知，未可
何	12	何～	4	何尝(4)
		～何	8	如何(7)[13]，任何
有	7	～有	7	唯有(2)，具有(2)，总有(2)，拥有
曾	11	曾	11	曾(6)，曾经(4)，不曾
所	9	所～	9	所到达之处(3)，所有(2)，所规定的，所产生的，所谓，所创造的
为	11	～为	11	成为(6)，更为，被誉为，化为，合为，无作为
其	5	其	5	其(2)，其中(3)
相	7	相～	7	相关(2)，相撞，相遇，相似，相望，相见
以	10	～以	4	委以(2)，加以，难以
		以	6	
已	0	～已	0	
忽	0	忽～	0	
否	2	～否	2	是否(2)
深	0	深～	0	
互	0	互～	0	
皆	0	皆	0	
系	0	系	0	
宜	0	宜	0	

（用例総数 200）

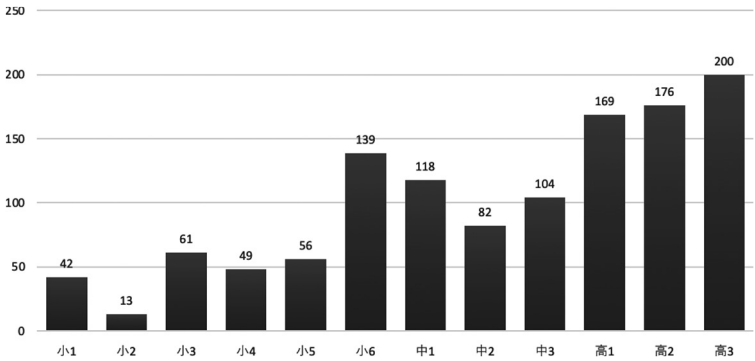

図 1　1 万字あたりの文語の用例数（延べ数）

は高校生の段階で本格化すると言ってよい。本稿では考察対象として含めなかったが，“高考”の満点回答においては引用や対句の多用と文語の使用は顕著に観られ，八股文を彷彿とする。

5　“之”，“而”，“如”，“于”の使用状況

それでは小学生の作文に使われる文語形態素を含む例を個別にみてみよう。学年を経るに従って，使用例のみならず，使用される語彙の種類も拡がる傾向がみえる。そのうち用例数が多い項目は“之”，“而”，“如”，“于”，“此”，“以”，“所”といった形態素を含む語群である。以下にこれらの用例数の推移をみながらそれぞれの用法について論じる。

5.1　“之”

では文語形態素“之”に関連する語が，各学年にどれだけ使用されているのかを観てみよう。図 2 は 1 万字あたりの文語形態素“之”を含む語彙が学年ごとの集計でどれだけ使用されているかを示したものである。横軸は学年を，縦軸は用例数の延べ数を示しているが，“之”の用例は，所有を表す助詞としての用法が多く，接続詞を構成する要素や代詞の用法は相対的に少ない。

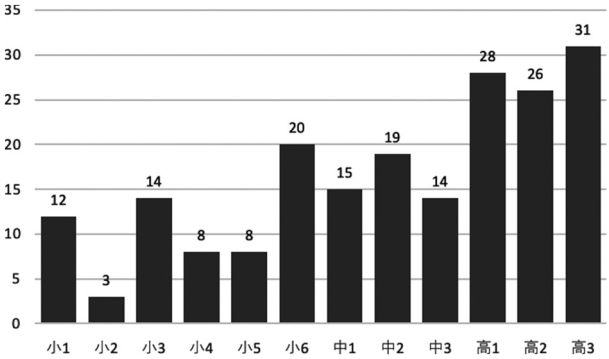

図２　１万字あたりの“之”関連語彙の延べ数

“之”の用例は高校生に入り，比較的安定的に使われるようになっている。紙幅の関係で詳細な分析を記述できないが，典型的な用例は“之”に後続する中心語が単音節語になっていることが指摘できる。そして“是之是非”や“天昂之别”の“之”を“的”に置き換えると“*是的是非”，“*天昂的别”のように非文となる点からも，“之”の使用は単なる“的”の置き換えではないことが分かる。

5.2　“而”

以下は文語形態素“而”に関連する語の使用状況をグラフにしたものである。“而”の用例は前置タイプ“而～”と単独で接続詞として用いられる例が多く，後置タイプ“～而”の用例は相対的に少ない。

おおむね３年を単位として増加するが，“而”に関連する語は高校に入って高止まる傾向が観られる。

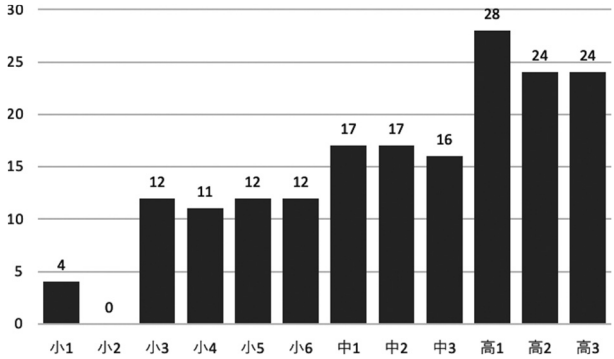

図 3　1 万字あたりの“而”関連語彙の延べ数

5.3　“如”

“如”の 3 つのタイプのうち，前置タイプと単独のタイプが相対的に多くの用例がカウントされている。文語形態素“如”に関連する語が，各学年にどれだけ使用されているのかを観てみよう。

“如”においては，小 6 が突出した傾向があり，これは中学生，高校生の用例を上回っている。そして“如～般”の形で使用される例が多く，“般”の用

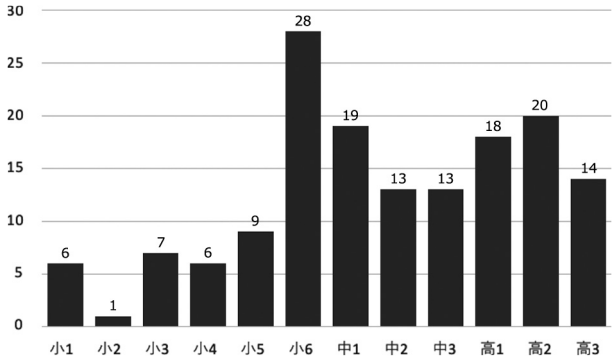

図 4　1 万字あたりの“如”関連語彙の延べ数

法も文語として覚える必要がある。一方で，高校３年生においては“好像”の用例はゼロで，高校２年生は１例，高校１年生はゼロであり，学年が下がる小学校６年生は７例，５年生は８例，４年生は８例観られることは，低い学年で“好像”が許容されるが，高い学年では忌避されていることを物語る。

5.4 “于”

文語形態素“于”に関連する語が，各学年にどれだけ使用されているのかを観てみよう。“于”の用法は接続詞の“于是”の用例を除外しているため，すべて形態素に後続して動詞や形容詞，介詞として用いられる例のみをカウントしている。

ここでは小６と高３において突出した傾向が観られる。とりわけ高３の使用が顕著である。“于”を用いた文語の用法は口語との間に構文上の違いを有する。例えば動詞に“利用”を使う場合，介詞構文をとって間接目的語を表現するが，“利用于”は“于”に後ろに間接目的語を置くのが一般的である。受動者は“利用”を使う場合，動詞の後ろに置くが，“利用于”は主語の位置に立つことが一般的である。こうした口語と文語における構文上の違いは文語への高い理解を要求され，これが小中での用例の少なさと関係している可能性もある。

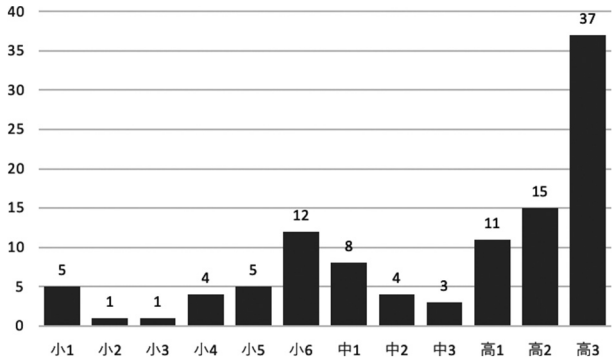

図５　１万字あたりの“于”関連語彙の延べ数

5.5　有効性の低い項目

その一方で，文語の反映を測る指標として有効性が低い項目もある。口語では“是”に相当する動詞の“系”，そして当為を表す“宜”は使用例がなく，また副詞“皆”も用例数が極めて少ない。これらは本稿で排除した成語に由来するものにしか使われていない。また“互～”，“深～”，“忽～”，“～否”，“～已”も，他の形態素と結合しにくいうえに，実際の用例も少ない。

おわりに

太田辰夫（1969）は近代の北京語の反映として 7 つの指標を提示した。本稿の基礎調査をもとに，現代の文語の反映をみる基準として有効と思われる項目を有効性の高い順に挙げたい。（括弧内は用例数）

1．“之”を含む助詞と代詞（接続詞）（199）
2．接続詞“而”（単独）と“而”を含む動詞・形容詞・接続詞（177）
3．動詞“如”（単独）と“如”を含む動詞・代詞・副詞・接続詞（154）
4．“～于”の構成をとる動詞・形容詞・前置詞（106）
5．代詞“此”（単独）と“此”を含む時間詞・動詞・副詞（88）
6．“总”を含む副詞（70）
7．介詞“以”（単独）および“～以”の構成をとる動詞・接続詞（57）
8．“所～”の構成をとる名詞・形容詞（49）
9．“其”を含む時間詞・代詞・副詞（39）
10．副詞“曾”（単独）と“曾”を含む副詞（39）
11．“～有”の構成をとる動詞・形容詞（37）
12．“～为”の構成をとる動詞・副詞（37）
13．“相～”の構成をとる動詞・形容詞（30）
14．副詞“未”の使用（26）
15．“何”を含む疑問詞（22）

これらの結果は，各学年あたり１万字の作文をもとに絞り込んだものに過ぎないが，コーパスとして用いた作文は任意に抽出されていることから，ある程度の傾向は看取できよう。これらの項目は中国語を母語としない話者による作文が文語をどの程度反映するのかを考える基準として応用可能となる。また，様々なレジスター（言語使用域）で展開される言葉に，どの程度の文語が反映されるかを考察する目安になる。例えば，口頭で用いられる文語表現にどのような項目がどの程度用いられるかを明らかにすることで，フォーマルな場における挨拶文やスピーチ作成に資すると考えられる。そしてこうした指標は外国人による中国語作文の文体を考察する際の基準ともなり得る。つまり中国語を母語としない話者の中国語作文における口語的表現の頻出[15)]はネイティブとって幼稚なものとして映る可能性があり，本稿で結論づけた基準に照らせば，小学生の作文の水準にとどまる可能性もある。

注

1）《第一范文网》のサイトは https://www.diyifanwen.com/　なお，類似のウェブサイトに范文网—日常写作的好帮手（https://www.fanwen.cn）や范文网（https://fww114.com），优秀范文模板网（https://www.fanwenmuban.com）など枚挙に暇がなく，なかには英語の模範例文を収録するものもある。

2）ここでは授業のテーマ，内容，目的といった事柄の他に，試験の例題や解答，解説などもアップロードされている。よって注１のサイトを渉猟すれば，中国で行われるほぼ全ての科目の教育内容と教育実践を把握することができる。

3）《第一范文网》の例文は選りすぐられた優秀作文であり，その文体も高度に洗練されたものとなっている。よって実際よりも文語に傾斜していると考えられる。

4）また中国の共通テストに相当する“高考”の満点や０点の作文までもが閲覧可能である。０点の作文は文章が拙劣であるというより，その内容が問題とされていると推察される。

5）小学生の低学年は300字や400字の比較的短い作文が多く，高校生になると600字や800字の作文が多いため，学年があがるにつれ１本あたりの字数が多い作文が収録されることになる。よって各学年の作文の本数は低学年ほど多くなっている。

6）“盼”は“左顾右盼”のように「見る」という意味。

7）冯胜利（2003）と三潴正道（2015）にこうした指摘がある。“或隐或现”などの表現もある。

8）“而”が成語の一部として用いられる例もある。“随之而来”，“背道而驰”，“自然而然”，“应运而生”。
9）“重于”のみでは主に“重于泰山”で使うが，主に［V］+ 重于の形式で，“着重于”，“偏重于”，“注重于”，“侧重于”の形で用いられる。
10）動詞のうち介詞をとるものに“相违”，“相左”，“相符”，“相见”などが挙げられるが，いずれも“与～相V”の形式をとる。このように“相～”の形をとる単語は連語においても文語が使われることが多い。
11）“皆可入诗”の用例も存在したが，蘇軾からの典拠のため除外した。
12）なお“素未谋面”は含まず。
13）このうち 3 つの用例は《世界是？和！》という文からとられたもので，当該作文では“　”で囲まれた文に書かれているものだが，実際の発話ではなく内なる声として記述されているので用例に数えた。
14）これは各学年の文字数を10万字に増加しても同様の傾向が観られる。この結果については稿を改めたい。
15）HSK における日本語話者による誤用については劉文雯（2015a）第 4 章を参照。

参考文献

太田辰夫（1969）「近代漢語」『中国語学新辞典』光生館
三潴正道（2015）「韻律から見た現代中国語白話文語（論説体）の特徴」初探」『麗澤大学紀要』98：73-78.
冯胜利（2003）《书面语语法及教学的相对独立性》《语言教学与研究》第 2 期：53-63.
冯胜利（2006）《汉语书面用语初编》北京：北京语言大学出版社
冯胜利（2010）《论语体的机制及其语法属性》《中国语文》第 5 期
梁思莹（2018）《留学生写作与体偏误分析》《媒介与文化研究》2018年第 2 期：115-117.
劉文雯（2015a）「对日汉语书面语教学研究―以培养学习者的书面语基础运用能力为目的―」大阪大学言語文化研究科博士論文 DOI：10.18910/55713
张伯江（2012）《以语法解释为目的的语体研究》《当代修辞学》2012(6)：13-22.